

「底が突き抜けた」時代の歩き方 485

社会が成熟すれば、個人は成熟しなくなる

精神科医の斎藤環が「『結婚』は『幸福』の前提か？」(『ちくま』05.6)のなかで、《「結婚」の問題は「成熟」の問題と良く似て》おり、《誰もが大人になれば成熟するのが当然と考えているが、しかし本当にそうだろうか》と問うている。

もちろんこの問いかけは、誰もが大人になれば結婚するのが当然と考えているが、しかし本当にそうだろうか、という問いかけと二重写しになっている。文章はこう続く。《先進諸国でしきりに指摘される若者の未熟化やモラトリアム期間の延長などは、成熟困難の問題が全世界的なものであることを示唆している。かつて私は、ここから「社会の成熟度と個人の成熟度は反比例する」という法則を導き出したほどだ。しかし、これはよく考えれば当たり前のことである。まだ成熟度が十分ではない社会では生存競争が激しく、個人が早い段階で「働き手」として自立しなければ生存すら危ぶまれてしまう。このような社会で成熟するという過程は、個人が自分の個人的願望や自由、あるいは希望を犠牲にして、「適応」を追求する過程でもあるだろう。

しかし、成熟社会においては、もはや個人の成熟は必需品ではない。そこでは個人のモラトリアム期間が著しく延長され、経済的豊かさは「就労」や「家族」の生存上の必要性を緩和し、地縁や血縁の希薄化は個人が何かを犠牲にしてまで「関係」に接続する意義を失わせる。言い換えるなら成熟社会とは、ある種の未成熟さに対しては寛容な社会のことである。だから未成熟な若者が増加したとしても、そのまま若者の不適応が増大するということにはならない。

いまや「成熟」は、「アイデンティティ」や「ほんとうの自分」などと同様、恵まれた人だけが手にすることができる一種の「ぜいたく品」のような位置に置かれることになる。いや、それは必ずしも「良いもの」とは思われていないかもしれない。先ほども指摘したように、成熟とは「捨てる」過程でもあるからだ。少なくとも家庭を持って子供が生まれたら、もはや若い頃のように夢を語ったり趣味に没頭したりすることは断念するほかはない。たとえば「おたく」が経験する最大の試練が「結婚」であるというのは、結婚後もアニメを観たりゲームで徹夜したりフィギュアに萌えたりという生活を維持することが、しばしば困難になってしまうからだ。

そうした状況にあって「結婚」と「成熟」はきわめて似通ったものになる。社会全体が貧しい時、結婚は明らかに生存のための方便だった。特殊な夢を持たない限り、結婚

は安定した生活と社会的信用と、なにより「イエ」の存続のために必要不可欠なものとされた。社会の安定とイエの繁栄が個人の幸福と自然に結びついている状況下では、結婚こそが幸福のためのインフラにほかならなかったのである。むろんそれが、多くの女性の忍従に支えられていたことは論をまたない。》

成熟社会で個人の成熟が強く要請されず、《そこでは個人のモラトリアム期間が著しく延長され、経済的豊かさは「就労」や「家族」の生存上の必要性を緩和し、地縁や血縁の希薄化は個人が何かを犠牲にしてまで「関係」に接続する意義を失わせる》とすれば、当然のことながら、「結婚」はしなくてはならないものではなくなる。成熟社会における「結婚」とは、社会的動機付けが希薄化し、個人的動機付けが増大するからだ。一言でいえば、「結婚」はしたい人がするものになってしまった。個人の成熟という問題が異性関係の帰結でもある「結婚」に大きな影響を及ぼしているなら、「成熟社会のつまらなさ」は個人として生きることのつまらなさだけではなく、「家庭生活」のつまらなさにまで貫かれているにちがいない。

東京学芸大の山田昌弘教授は05・2・28付毎日で、今の日本のカップル状況を「作りやすく、壊れやすい」関係にあると要約して、次のように数字を列挙する。

《30代前半の未婚率は、1975年には、男性14・1%、女性7・7%だったのが、2000年には、男性42・9%、女性26・6%まで上昇した。結婚が減る代わりに、同棲や恋人がいる人が増えたのではと考える人もいるかもしれないが、配偶者も恋人もいない人は、ここ15年でむしろ増えている。02年の時点で、30代前半をとれば、男性35%、女性19%が、異性のパートナーがいないという状況なのだ（国立社会保障人口問題研究所の調査による）。

一方、離婚は1980年から増え始め、90年代後半に入って急上昇した。75年には12万組程度だった離婚が、2003年には28万組に達している。比較するデータはないが、同棲や恋人関係も、解消するリサイクルが早くなっているという印象がある。》

不思議に思うかもしれないが、結婚が減り、離婚が増えているからといって、異性間の愛情関係に変化が起きているわけではない。結婚したいという欲求が強まっているのに、できなくなっているのだ。つまり、愛情関係を強く求めるようになればなるほど、結婚は遠のき、離婚が増えるという現象が生じているのである。そして結婚がしにくくなっているのであれば、せめて子供だけでもほしいという願望が、女性にも男性にも高まっているのがみられる。児童虐待が減少する気配は一向にみられないにもかかわらず、だ。

成熟社会がつまらなくなったのは、国民全体の「貧しさからの脱出」という共通目標が達成され、新たな共通目標が見出されなくなったからである。成熟社会が国民全体の共通目標を失ったように、成熟社会における結婚生活もまた、「豊かな家族生活」を築くという夫婦関係にとっての共通目標を失ってしまったのだ。だから、「なんのために

結婚するのか」という問いは、結婚はしたい人がすればいいし、したくない人はしなければいい、という個人的な問題になってしまった。もちろん、成熟社会にあっても結婚する以上は、これまでとは異なる新たな「豊かな家族生活」を築くという目標を待たざるをえなくなるだろう。双方の愛情関係を維持するだけでは、あまりにも不安定であるのはわかりきっているからだ。これまでの「豊かな家族生活」という物質的な目標であれば、貧しい社会の中で一つ一つ手に入れることで目標の達成を身近に感じ取ることができた。しかし、物質的な繁栄が達成された成熟社会での「豊かな家庭生活」という目標がどのようなものであるか、が一向にみえなくなっているなかで結婚が遠去かり、離婚が急増しているのだ。

山田氏は、結婚生活にとっての分かれ目は「我慢できるかどうか」にあると説く。

《戦後から1980年ごろまでは、日本の夫婦関係はたいへん安定していた。ほとんどの人が20代半ばに結婚し、離婚も少なかった。その理由は、夫婦に「豊かな家族生活」を築きあげるといふ共通の目標があったからである。

若者たちは、豊かな家族生活を二人で作り出すという夢を実現させるために、相手に多少の「妥協」をしてでも、早めに結婚に踏み切った。結婚後、夫は、家族の生活を豊かにする給料を持ち帰るために、仕事に励む。妻は家事をこなしながら、生活環境を整える。お互いの役割をこなすことが愛情表現と思えたのだ。たとえ、コミュニケーションがなくても、同じ目標を目指しているという事実が、夫婦の連帯感や信頼感を作り出していた。そして、現実に家族生活が豊かになっている、つまり目標に近づいているという実感がある限り、夫婦間に多少の不満があっても、「我慢できた」のである。

問題は、目標が達成された所から始まる。

1980年ごろから、晩婚化傾向が始まる。同時に、「家庭内離婚(林郁)」「濡れ落ち葉(樋口恵子)」など夫婦間のコミュニケーションの欠如を指摘する言葉が話題となる。

これは、日本社会が豊かになり、夫婦の共通の「目標」が失われた結果生じた現象である。マイホームを手に入れ、家電製品や自家用車をもち快適な生活が可能になり、子どもの学歴もつけさせた。とりあえず、豊かな生活は実現される。目標は達成された、さあ、これから夫婦で楽しもうと思っても、二人で楽しむ手段が見つからないのだ。》

成熟社会以前の結婚生活は、《夫婦に「豊かな家族生活」を築きあげるといふ共通の目標があ》る限り、コミュニケーションがなくても成り立っていたが、目標が達成されると、コミュニケーションの欠如が大きく浮き彫りになって、結婚生活の維持は困難になったということだ。いいかえると、目標達成以前はコミュニケーションが不在でも夫婦関係は「我慢できた」が、目標達成以後はコミュニケーション不在に「我慢できなくなった」のである。要するに、目標抜きでお互いに面と向き合わざるをえなくなる結婚生活に夫婦関係は耐えられなくなったのだ。このことは、生活づくりや子育てにおいて

夫婦間のコミュニケーションがほとんど育成されてこなかったことを物語っており、数十年にわたる結婚生活を共にしながら、お互いに何を考えているかが全くわからないという驚くべき現実にはやがて直面することを意味している。

夫婦間にコミュニケーションがないということは、夫婦と子どもとの間にもコミュニケーションがないということであり、子どもたちは両親がコミュニケーション不在による「家庭内離婚」に直面する事態を出発点として、異性間交流 結婚生活を目指さなくてはならないという、極めて困難な重荷を負わされていることに気づく。今の若者のコミュニケーションスキルの低さがよく指摘されるけれども、年長者も同様にコミュニケーションスキルは低かったのである。年長者はそれでも結婚生活は維持できた（ように見える）が、今の若者はそれでは結婚生活はやっていけなくなっているのだ。日本の家族生活におけるコミュニケーション不在という負の遺産を背負わされて、若者はコミュニケーション能力を持ってないまま、異性間交流 結婚生活という自分にとっての将来の壁の前で、前へ突き進むこともできずに立ち尽くす以外になす術がなくなっている、というのが彼らの直面している状況である。

《結婚を目前にした若者も迷い始める。「パラサイト・シングル」と私が呼んだ親元で既に豊かに暮らしている未婚者は、「結婚して豊かになる」という目標は、持ちたくても持てない。

目標が無くなれば、カップルを結びつけておくものは、ただ「好き」とか「一緒にいたい」という感情だけとなる。カップルが純粋に愛情を追求するものとなったと言えは聞こえがよいが、別の見方をすれば、「感情」という不安定なものに、カップルの基礎を委ねたと言える。「嫌い」と思えば、一緒にいる理由はなくなる。「いつまでも一緒にいたい」という強烈な感情がなければ、結婚する理由もなくなる。日常的な生活をすれば、嫌という感情はどうしても現れる。また、相手を強く求める感情は長く続かない。

カップルが我慢できなくなったのではなく、「我慢しがいなくなった」のである。結婚相手に妥協しなくなったのではなく、「妥協しがいなくなった」のである。相手と長期的に持続的な関係を築くためには、自分の感情に対し、多少の我慢と妥協が必要である。我慢や妥協も「努力」の一種である。戦後カップルは、努力が「豊かな生活を築く」という形で報われると信じられたからうまく行っていたのである。二人の間に共通の目標がなければ、自分の中に生じた「嫌だ」という感情を抑えるという努力は空しく感じられるだろう。》

この山田氏の説明に差し込んでおきたいのは、異性に対する幻想量が減少していきつつあるという視点である。昔のカップルには「豊かな家族生活」という共通目標があったとして、その共通目標の根底には濃密な異性に対する幻想量が漂っていたことを忘れてはならない。恋愛感情の強さがカップルを共通目標に積極的に向かわせてきた。いう

までもなく幻想量は、「満たされぬ思い」を源泉としている。「満たされぬ思い」が激しければ激しいほど、大きければ大きいほど、幻想も激しく大きく、「満たされぬ思い」の空洞を埋めようとする。成熟社会になって「革命で世界を変える」という発想がリアルさを失ったのは、社会に対する「満たされぬ思い」が縮小して、革命幻想が衰えていったからである。同様に成熟社会は、異性に対する「満たされぬ思い」をも縮小せしめて、異性幻想を衰えさせていった。革命を信じることができなければ革命幻想は存在しないように、異性を信じることができなければ異性幻想も存在しなくなる。

昔のカップルに異性幻想が強かったのは、身体的な性的接触が非常に制約されていたからだ。性的接触への憧れが「満たされぬ思い」を激しく募らせていくことになった。ほとんど我慢することなく欲しいモノを手に入れることができるようになった成熟社会では、性的な関係においてもそれほど我慢せずに欲望を満たせるようになった。セックスに至るプロセスが短縮されるにしたがって、性的接触への憧れも減少し、「満たされぬ思い」も弱くなり、異性幻想は希薄化していった。つまり、「好き」とか「一緒にいたい」という感情も薄まり、彼や彼女と「いつまでも一緒にいたい」という気持は持続しなくなった。成熟社会ではカップルにとっての共通目標がなくなっただけではない。カップルを結合させる唯一の紐帯であるべき「好き」とか「一緒にいたい」という感情すらも拡散させていく作用を強めているのだ。共通目標もなく、「好き」という感情がはっきりとした輪郭を持ちえなくなったとすれば、「我慢しがいがなくなった」という以前に、何のために我慢をしなければならないのか、という疑問と反撥がカップルの間にたえず漂いつづけることになるだろう。

当然のことだが、成熟社会はいつまでも続かない。成熟社会を支えつづける社会的コストに限りがあるとすれば、平等幻想が崩壊するなかで成熟社会を享受できる層と、そこから脱落する層とが明確に分化しはじめる。そうすると、成熟社会によって失われた「豊かな家族生活」を築きあげるといふ共通目標の喪失と、異性幻想の弱まりがもたらす「好き」とか「一緒にいたい」といふ感情の持続性のなさや不安定さのうえに、成熟社会から脱落していく惨めな気分も申し掛かってくることになる。成熟社会から脱落して以前の貧困社会に戻るのではない。貧困階層に突き落とされていくのである。同じ貧困にみえても、社会全体が貧困である地点からすべての国民が一斉に成熟社会にむかって上昇していくのと、上り詰めた成熟社会から自分たちだけが転落していくのとは、決定的に異なっている。前者には希望があり、後者には絶望しかない。一度転落すれば、どこまでも転落するという恐怖にも直面しなければならない。

山田氏は、成熟社会のなかでの貧困という事態にも向き合わざるをえなくなるカップルの困難さにも視線を向けている。

《21世紀を迎えた現在、豊かな生活の維持でさえも難しくなっている。夫の失業がき

っかけで離婚するケースも増えている。かろうじて保ってきた「生活のために一緒にいる」という理由さえ崩れ始めている。「個々のカップルが新たな共通目標を見つけ、それに向かうことを二人で楽しむ」という事ができればいいのだが、言うは易く行うは難し、それをスムーズに実現できるカップルは少ない。カップルは「生活を維持する」ためにかろうじてつながっているのか、それとも、揺れる感情に従って結合と別離を繰り返すのだろうか。カップル関係の混迷はまだまだ続きそうである。》

コミュニケーションのスキルも能力も身に着いておらず、異性幻想が低調なまま「一緒にいる」ことが持続できなくなれば、「個々のカップルが新たな共通目標を見つけ」ることが、どうしてできるだろう。「それに向かうことを二人で楽しむ」双方の力量なるものが、どこからやってくるというのだろうか。我々は成熟社会を迎えることによって、「家族生活の廃墟」に直面することになったのではないだろうか。「成熟社会のつまらなさ」とは、成熟社会なるものがその社会の外に「まだなにかがある」ことを我々から夢見、信じることを奪い去ってしまったことの成熟社会であり、我々をどこかに行けそうでどこにも行けない「囚われの身」に完全にしてしまったところにあるといえるかもしれない。作家の桐野夏生は05.1.4付朝日で、成熟社会がどのような「新たな貧困」を生みだしているか、について述べている。

《弁当工場で働くパート主婦たちを主人公にした「OUT」が欧米で翻訳されたあと、海外の読者から寄せられた質問があります。それは「日本ではなぜ、夫がホワイトカラーなのに妻はブルーカラー労働をしているのか」というものでした。

バブル経済が崩壊したあとの96年に取材して書いた小説です。実際に職場に行ってみると、パート女性の多くは40代後半から50代でした。深夜0時から早朝5時半までベルトコンベヤーの前に立ちっぱなしで弁当を作る。休憩時間もなく、トイレへ行くのも許可制で、更衣室は男女兼用です。奴隷工場ではないか、と私は思いました。

奴隷とは、努力をしても「なりたいもの」になれない人々のことです。一生「下働き」をさせられる女性がそれです。

彼女たちは家計補助や小遣い稼ぎのために働いていました。妻たちのこんな過酷な労働実態を夫は知っていたらどうか、と私は考えました。「中流」に見える家庭の中に「階層的な分断」があることを夫は、社会は知っていたらどうか、と。》

パート女性たちの過酷な労働実態が悲惨なのではない。本当に悲惨なのは、自分の周囲は成熟社会の華やかさに彩られているのに、自分だけはなんの楽しみもない過酷なパート労働の中に取り残されている、というやるせない思いが募ってくることだ。貧困社会のなかで誰もが過酷なパート労働をしいられているのであれば、自分も他の者と同様に、いつかやってくる「豊かな家族生活」という目標を目指して耐えることができた。だが貧困社会を抜けだして成熟社会が達成されたなかでの奴隷にも等しい過酷なパート

労働に自分だけが見舞われることになったのである。成熟社会の華やかさが裏面で蓄積してきたマイナス面が一挙に自分に申し掛かってくるかのように感じられる、「下働き」労働にほかならなかった。その「下働き」労働が、パート女性の営んでいる「豊かな家族生活」を維持する糧^{かて}になっているのであれば報われもしたが、今やその過酷な労働そのものが豊かでもない家族生活を更に押し下げ、破壊する要因になりつつあるのだ。

《夫たちの会社が人件費を削るためにパートを使い、その労働条件を悪化させればさせるほど、妻たちはより最底辺の周縁労働に追い込まれていく。妻が働かず済む家庭が中流のモデルだったとすれば、これは、中流が分解されたことに伴う新しい悲劇的な構造だとも言える。

戦後の繁栄というものの裏側を見た気がしました。女性読者から「よくぞ書いてくれた」という反響が多く届きました。

ただし今になってみると、当時の方がまだ経済の状況は良かったのだと思えます。この数年間に日本では、二つの新しい貧しさが見えてきたからです。

一つ目は、派遣労働の増加による女性たちの貧困化です。(中略)業者は女性たちを「容姿の美しい人」「英語力のある人」「四大卒の人」などとカタログの中の一人のように扱っていました。「気に入らなかつたら10日で切っていい」という話も伝わってきた。「OUT」の主婦は直接雇われていたけれど、派遣によって女性は中間搾取までされるようになったのです。

二つ目は若者たちの転落です。彼ら・彼女らは今、フルタイム労働に就ける機会を極端に制限され、安価なパートタイム労働力として使い捨てられています。先日ある女子大生に「なぜ怒らないの」と尋ねたら、「怒れません。男子も同じですから」と言われました。若者は絶望感にとらわれ、「なぜ私たちは使い捨てられるのだ」と批判の声をあげることすらない。》

桐野夏生のこの説明によって、「成熟社会のつまらなさ」が別の世界を夢見ることができなくなった出口なしの感覚や、社会の流動性が加速させていく「入れ替え可能な存在」としての個人化といった事態の上に、成熟社会を成立せしめてきた「中流」家庭の分解が進行し、若者たちが雇用システムの激変によって成熟社会のなかにもはや居場所を見出しえなくなりつつあるという事態が付け加わっていく様相を辿っているのがみえてくる。つまり、「成熟社会のつまらなさ」は新たな救いのない貧困としてのつまらなさの骨格を大きく剥き出しつつあるということだ。更につまらないのは、若者はますます絶望の淵に追いやられているのに、「批判の声をあげることすらない」のである。成熟社会の貧困は若者たちの内面にまで巣くってしまっているのだ。ここで桐野夏生は立ち止まって考え、我々も立ち止まって考えざるをえない。どこにむかって足を踏みだせばよいのか。踏みだすべき「足」をどのようにしてつくりだせばよいのか。

《高度成長期の日本では、他人に負けなければ幸せになれると信じていたのだと思います。そこでは「所有」が幸福の原理になっていた。しかし今では男性にとってさえ、所有が幸福につながるという神話は現実味を持たない》が故に、《「所有」に代わる新しい豊かさの原理を見いだすことが、日本の課題》であると、彼女は提案する。その課題を掘むために、我々がなすべきことはなにか。《「なぜこんなことになっているのか」という問題意識への第一歩》にするために、まず若者や女性が「私は貧しい」と認識しなくてはならない。自分が貧困の中に置かれている現実を直視することから一歩は始まらなければならないということだ。《もちろん、「一生安定した職に就けず、結婚もできず、子供も住宅も持てない」と落胆する若者に、現実を見ろとは言いにくい面もあります。私は自分で道を切り開こうと考えたけれど、それは経済的に拡大し膨張する社会を背景にしていた。しぼんでいく社会を生きる今の若者には、異なる現実もある。》

貧相な「現実を見る」とは、貧相な「自分を見る」ということである。見たくないイヤな現実であり、見たくないイヤな自分であろうとも、そこから歩を進める以外にないし、そのためには、イヤな現実、イヤな自分を直視するほかない。イヤな現実やイヤな自分から逃げようとするのは、逆にますますその中に取り込まれていくだけであり、イヤな現実、自分と本当に手を切るためには、その中に必死に出口を探すことから着手しなくてはならない。その出口について、《「正社員の夫と専業主婦の妻と子供」という経済成長期に広まった家族モデルが歴史的役割を終えつつある》という現実を直視するなら、既存の役割分担の無効性を踏まえて《新しい関係のあり方を探っていくべきだ》というのが、彼女の主張である。では「新しい関係」とは、どのようにイメージされるものなのか。

《「男は女と子供を養うもの」といった前世代のモデルにとられるのではなく、夫と妻が互いに話し合いながら、それぞれのペアにとって最良の役割分担を見つけていくのです。収入が不安定なため親元を離れられない若者たちは、子供という役割を捨て、仲間と共同生活する道を探ってもいいはずです。》古い家族関係に取って代わる新しい家族関係の創出を、そして収入が不安定になった若者たちは仲間との共同生活の道を、というように、あたかも「貧しさ」から「豊かさ」への反転といった調子で語られている。

《所有によって豊かになるという神話を信じられなくなった以上、人と人との関係性を見直していくというこの作業しか、私には糸口が思い浮かばない》としても、ここには、成熟社会の中ではびこる貧しさとは単に「所有」における貧しさだけではなく、なによりも関係の貧しさとして露わになるということへのまなざしが欠落している。

関係がより一層貧しくなっていく家族関係の中で、どうして《夫と妻が互いに話し合いながら、それぞれのペアにとって最良の役割分担を見つけていく》ことができるだろう。引きこもりやニートといった現象に分解されつつある、コミュニケーションスキルを持たない若者たちに、どうして《仲間と共同生活する道を探》るようなことが起こり

えよう。彼らが直面している貧しさは、そんなところへ向かうこともできなくなっている貧しさであることを踏まえなければ、成熟社会の中の悲惨さに対する視線は冷徹であっても、出口を見出していく思考は楽観さをどうしても免れえないだろう。新たな家族関係や若者たちの仲間との共同生活への道の模索から、《実際に新しい豊かさの原理が見えてくるかどうか、私はやや悲観的です》という以前に、なんの現実的な裏付けももたない、彼女の安直な思考こそが「悲観的」といわざるをえない。

しかし、《ただ直感的に言えるのは、貧しさの「どん底」から見える景色に、恐れずに目を向けていくべきだろうということです。新しい世界へ跳躍するための契機は、どん底の意味を突き詰めようとする営みの中にある》という彼女の直言は、その通りであろう。《豊かさが失われたと多くの人が感じている時代には、貧しさとは何か、人間はどこまで貧しくなるのかという問題に、内省を通じて近づいていく作業が求められているはずです》という姿勢に間違いはないし、そこに一縷^{いちる}の望みを託す彼女には共感を覚えるけれども、依然として我々の前に立ちはだかるのは、「社会が成熟すれば、個人は成熟しなくなる」という冷徹な命題である。未熟さにどんどん追い詰められていく我々に、《貧しさの「どん族」から見える景色に、恐れずに目を向けていくべき》聡明さや気概や力量などがどのようにして、なんの前触れもなく宿るといのであろう。それとも人間というものは、窮地に追い詰められれば追い詰められるほど、一発大逆転の可能性を秘めた底力を貯えている、素晴らしく偉大な生き物なのであろうか。

桐野夏生は、自分の「貧しさ」を問え、というが、その前に本当に我々は「成熟社会」に生きているのか、を自問する必要があるだろう。自分たちが「成熟しなくなる」ような成熟社会とはなにか、をこそ自問しなくてはならないだろう。誰にとつての「成熟社会」なのか。もちろん、消費する人間にとつての成熟社会にほかならない。消費する人間の飽くなき欲望が十分に満たされる社会になったということだが、そこには自分自身を消費することになんのためらいも違和感も抱かなくなった人間が大量に生みだされるようになった、という背景が大きく迫りだしていることを覗き込まなくてはならない。つまり、自分が自分を消費することによって「成熟しなくなる」、その完璧さにおいて「成熟社会」が我々の前に出現しているということだ。したがって「成熟社会のつまらなさ」とは、我々が我々自身を消費することになった果てのつまらなさにほかならない。

桐野夏生はパート女性が働く現場でモノを作るよりも、自分自身を凄まじく消費し、そして家族関係を分解に至らしめていく様に触れていたが、東大助教授の佐藤俊樹が書評(05.5.29)で取り上げる「アマゾン・ドット・コム^①の光と影」にも、消費社会の行き着いた姿がみられる。アマゾン・ドット・コムとは、《インターネットを使った本やCDの通信販売の最大手であり、《今や紀伊国屋や丸善に次ぐ売上高だといわれている。/大都市ならともかく、地方の書店売り場は、本の数も種類も少ない。それ

がアマゾンなら、欲しい本を手軽に検索して、注文できる。届くのも早いし、1500円以上買えば送料無料。返品も簡単にできる。》

《その便利さの秘密をさぐろうと、著者はアマゾンの物流センターのアルバイトに潜りこむ。そこで見たのは、本も人も徹底的に物としてあつかうシステムだった。本の中身は無視、帯も邪魔。あるのは1分間に何冊片付けるかという、ノルマとの競争だけ。

そんな労働現場を支えるのは、若者から中年男女にまでひろがるアルバイト生活者である。センターを管理する正社員にとって、それは安値で「使い捨て」がきく便利な部品でしかない。

しかし、この本で一番心に残るのは、その「絶望工場」ぶりではない。著者は自分でもアマゾンの本を買い、「お客さま」にもなる。職場への嫌悪感が募る一方で、行き届いたサービスには喜びと満足を感じる。両方の思いを、足して二で割ることもできず、ただともに体験しつづける日々。

その姿は、易くて便利な消費社会を生きる私たち自身を、全身丸裸で見せつける。そこに、この本の本当の凄さがある。

だから、安易な感想ももてない。例えば、働く人たちも「いい人」ばかりとはいえない。ちょっとしたことで、すぐやめていく。キレやすく、キレることを自分に許している人々でもある。

「絶望」というには、あまりにも白茶けた現実。その感覚にどこか麻痺させられたまま、私もこの評を書いている(以下、略)》

ここで浮き彫りにされているのは、《本も人も徹底的に物としてあつかうシステム》のなかで、働く者にとっては《嫌悪感が募る》職場であるが、「お客さま」にとっては《喜びと満足を感じる》《行き届いたサービス》にほかならないという消費社会の現実である。《本も人も徹底的に物としてあつかうシステム》の確立によって、消費者への満足すべき《行き届いたサービス》が得られているということだ。そこでは働く者の職場への嫌悪感と、消費者の満足とは比例しているといつてよい。ちょうど、「社会の成熟度と個人の成熟度は反比例する」(斎藤環)のときよく似ている。つまり、働く者の喜びと満足を犠牲することによって、消費者の喜びと満足が得られているという構造は、中年女性の過酷なパート労働によって維持されている消費社会を貫いているということだ。

宮台真司は援交少女について《「軽々と生きる」新世代の可能性を感じた》が、《見込み違いだった。彼女らの多くは疲れ、メンヘラー(精神科に通う人)になった》と書いていた。援交によって消費社会で消費するお金を手に入れるという目的を達成したり、自分の優等生ぶりを打ち破ってバランスを取ることで、この「つまらない」社会を少女たちが「軽々と生きる」と感じたが、援交することの嫌悪感のほうがお金やバランスを上回ってしまったということだ。いいかえると、援交の不快感が援交で得られる快感を

上回ったのである。快感には限度があるけれども、不快感には限度がないようにみえる。ダッチワイフに等しい性的な物として扱われる援交少女の不快感は、消費社会を貫く《本も人も徹底的に物としてあつかうシステム》のなかに充満する働く者の不快感と通底している筈だ。我々が消費人間としてのみ生きているわけでもないにもかかわらず、消費人間であることを突出させられている「成熟社会」なるものが、消費人間としての快感以上に働く者の不快感を増幅させているなら、そんな社会が面白い筈がないではないか。

書評は、《著者は今フランスに住んでいるそうだ。理由は書いていないが、読んだ後、私もこの社会の外に無性に出たくなった。ノでも、その時はきっと、アマゾンで日本語の本を買うんだよなあ...》で結ばれているが、この不快感が募る社会の外に出たいけれども、出られないことがここで暗示されている。「どこかに行けそうでどこにも行けない」という呪いが、消費社会にはずっと付きまとっているといつてよい。いうまでもなく「成熟社会のつまらなさ」は、極端に人間の顔に出てくる。いろいろな国を旅している作家の椎名誠は04.12.28付朝日で、「世界の中の日本人の顔」について記している。

《生活は貧しいが日々の暮らしぶりが生き生きとしている人々、というのが世界の途上国でみる大多数の普通の人々の顔である》のに対して、経済的に豊かになった筈の「日本人の顔」は、ではどうなのか。《ぼくはいまの日本人の顔は小泉首相が代表しているような気がする。シニカルに狡猾に感情を隠蔽した蠅細工のような顔。気張っているが本当は臆病で不安に満ちた人間不信の表情。世界のどこにも見ない顔》という。一言でいえば、魅せられる表情ではない、「つまらない」顔なのだ。戦後60年かけて日本人はこんな顔をつくってきたのである。《こんな顔をした日本から2005年はなんとか脱却してほしい、と思う。とくに日本の子供たちにまでこの異態が伝搬していかないうちに》と続けるが、なにをおっしゃる、椎名さん、といわねばならない。日本人の「つまらない」顔は2005年になっても深刻に続くし、日本の子供たちがどんな顔をしているのか、見る機会がないほど海外を旅してまわっているのですか、と思わず訊き返したくなる。

アメリカで肥満している人がやたらに増え、《重そうに巨大な腹を抱えてヨタヨタ歩いている男や女を見ると、ストレスに負けて何でも食ってしまっているオロカさ、みたいなものを感じる。ノバリ島で朝方、川に花を流し、大地に頭をつけて祈っている貧しい姿をした老婆を、化粧品とアクセサリーの鎧をまとったような太ったアメリカ人の旅行団が不思議な動物に出会ったようにしてぱかんと突っ立って見ていた。文化度の差に貧富は作用しない、というようなことを感じた瞬間だった》と、《国力と、そこに住む人々の人間としての生き甲斐の充足度》とは比例しないという印象を抱く。そう、「社会が成熟すると、個人は成熟しなくなる」という命題が、ここにも貫かれている。マンマーのような軍事政権下のアンフェアで不健全な最貧国であっても、《腰巻き姿で田舎のパゴダ（仏塔）の前でみんな家族の健康などを一心に祈ってい》る、《陶然とした

表情で瞑想する人々はみな痩せていたが、不思議にいい顔ばかりだった》という。

《ラオスの山岳民族やアマゾンのインディオ、チベットの4千メートル地帯に住む高山遊牧民、パラグアイの川民族などは明日の太陽と水のことのほうがまず第一の関心事で、世界のことなど何も知らなかった。毎日の生活が大変で食うのにやっとというのが殆どだったが、なぜかこういうところに住んでいる人々はみんないい顔、いい表情をしていた。》アルゼンチンの港町の隅で熱心に《アルゼンチンタンゴの練習をしているいかにも悪そうな若い男女》も、《ポルトガルの場末の居酒屋で真夜中、ファドを朗々と歌う市井の老人男女》も、人々の顔は《みんな個人的な自信に満ちて実によかった》が、《とくに子供たちの顔がみんな生き生きとしていたのが印象的だった。青年は生きていくために真剣な表情をし、老人は穏やかな顔をしていた。みんな日本にはない顔やその表情だった。》

他方、《経済成長著しい中国や、社会主義から資本主義に移行してけたたましい活況と混乱の中にいるモンゴルなどのがさついた国の気配や空気感は、どこかかつての日本の気配がダブった。国の経済がやみくもに拡大成長していくことは人の顔や表情を変えていく何か“負のエネルギー”のようなものを強烈に内包しているのではないかと考えた》と記す。もちろん、《“負のエネルギー”のようなもの》はない。そうではなく、我々人間にとって経済基盤の確立それ自体が目標ではなく、安定した経済基盤の上に我々自身のまだ見ぬ種々の才能を発掘して、固有の能力を開花させていくことに生き甲斐と喜びを見出す方向に突き進む必要があるのに、経済成長が消費資本主義へと発展することによって、生きるための適度な消費から消費のための過剰な消費へと我々の欲望が際限なく引き出されていき、日々なにかに追い立てられているような不安な顔付きになってしまったのだ。

貧困社会を脱したのに、成熟社会でかたちづくられている我々の顔は貧困社会で生活を営む人々の顔にはるかに及ばなくなっている、という進歩の皮肉を我々は味わっているのである。今の成熟社会は「つまらない」顔しかつくりださないのだ。宮台真司は《つまらなさは深刻だ》といいながら、つまらなさそうな顔をしている《トップか否かに関係なく、数少ない「面白そうに生きている人」に注目が集まっている。そこに処方箋のヒントがある》と語る。その人のキャラではない。この「どこにも行けなくなった」糞詰まりのような社会で、どこかに風穴を開けていることによって「面白そうに生きている人」だから、《処方箋のヒントがある》のだ。《「革命で世界を変える」という発想はリアルさを失い、「システムの外」は想像不能になった》(宮台真司)が故に、このシステムの内にもどのように風穴を開けるかということが、成熟社会における真の革命的な課題として我々に突き迫っているとさえいえる。風穴を開けて新鮮な空気を入れないかぎり、我々は成熟社会のなかで真に成熟することもできないし、「成熟社会のつまらなさ」に押し潰されていくほかないだろう。

2005年6月18日記

